

COVID-19の経験と ともに変化する 人材養成のかたち

特集にあたって

人材養成にとって大切な 「なにか」を見つけて共有する

この2年半の間、私たちは未曾有のパンデミックに翻弄されてきました。新型コロナウイルス感染症は、2020年初頭、わが国で初めての感染が確認された後、海外からの帰国者の感染が散見されはじめました。振り返ると、このころはまだ、「感染予防をしていこう」という雰囲気だったのではないのでしょうか。2月にクルーズ船での集団感染が発生してからは、「指定感染症」「検疫感染症」と定められ、クラスター対策も開始されました。このころから一気に緊張感が高まったように記憶しています。

新型コロナウイルス感染症の蔓延は、医療機関と教育機関の双方に大きな影響を与えました。日々の業務レベルから中長期的な計画まで、変更を余儀なくされたことは一つや二つではないはずです。

筆者自身、2020年度初頭の体験は一生忘れない出来事です。授業も対面からオンデマンドのみに変更、臨地実習も中止され、オンラインでの実施となりました。前年度と同じことは何一つできない、そのなかでいくつもの科目を新たに一から作り上げなければならない、使えるツールもこれまでとは異なる。心身ともに追い詰められながらも授業案・実習案を作ることができたのは、インストラクショナルデザインの考えに沿って、各科目の到達目標に学生が到達するには何が必要かをロジカルに考えられたからだと思います。使えるツールの限界もあったことから、授業や実習の計画はあくまでそのときのベストであり、盤石とはいえないものでしたが、そのときに創出したデザインの本質的な部分は、アップデートを重ねながら現在も使い続けています。パンデミックがなく平時が続いていたなら、はたしてこのように吟味を続けていただろうかと、時々自問することがあります。

本特集について企画を練りはじめたときは、感染者数は高止まりの状態、東京ではまん延防止等重点措置が

取られている時期でした。在宅ワークが一般的な働き方の一つに加わり、会議も学術集会もオンラインが主流でありつつも、ピーク時と比較すると、だんだんと感染拡大前に戻っている部分もあるように思いました。

教育や研修を提供する立場にある皆さんは、それぞれの場で、可能なかぎりの工夫をし、さまざまな方法を創出されたと思います。いくつかは緊急対応的に打ち出して実施されたものだったかもしれませんが、しかしながら、平時であれば考えられなかった企画も、実施してみるとその成果に驚いた、ということがたくさんあったのではないかと思います。感染の状況が元に戻っても、使い続けられる内容として特徴的な「なにか」を見出せたのではないかと。きっとそこには、人材養成の本質的な「なにか」があったからだと思っています。

学生の実習も、いまだに影響が続いています。臨地実習は時間を短縮して実施している学校も多く、ベッドサイドにいる時間が一回何分までと決められていたり、ケアも限定されていたりする場合があります。臨床体験が学生を大いに成長させることは言うまでもありませんが、十分な経験のないまま卒業する学年が、少なくともあと数年は続くでしょう。

本特集では、執筆者の方々がそれぞれの実践で見つけた「なにか」を言語化し、誌上で共有することで、今後の新たな知の構築につながるのではないかと考えています。読者の皆さんには、一つひとつの取り組みについて、自身の施設で取り入れることができるか、ぜひとも検討していただきたいと思っています。もちろん、各施設の状況に合わせた修正は必要になると思いますが、さまざまに修正されて今後も使い続けられることを期待したいです。

西田志穂 Nishida Shiho

共立女子大学看護学部小児看護学教授